ボワソナード氏 財産差押法草案 第二巻

司法省記録文庫
保第八百廿六號
二冊ノ内

第五號
第三架
第八

司法省記録課藏書
第一二號

司法省
三六 第六七號
寄贈圖書文庫

XB500
B 1
2 b

司法省記録之印章

倒産ノ場合（デコンフヰチュール）

XB500
B 1
2 6

無資力ナル義務者ノ財産ヲ差押ヘル事、之ヲ管理スル事、及ヒ之ヲ精計スル事ニ関スル法律草按ノ緒言

此事タル左ニ述フル三個ノ模様ニ付テ之ヲ観ルコヲ得可シ

第一、自己ニ對スル裁判言渡アルニ因リ、又ハ裁判言渡ヲ要セズシテ執行力ヲ有スル公正ノ証書(公証人ノ認定シタル義務)アルニ因リ、既ニ要求ヲ受ク可キ負債ヲ辨済セサル通常ノ義務者ノ模様、

第二、判然無資力トナリタル義務者ノ模様、即チ其負債ノ高(自ラ拂フ可キ部分)ガ明カニ其財産ノ高(已レニ受ク可キ部分)ヲ超過スル場合、

第三、自己ニ對スル執行力アル証書アルニ非ズ又其無資力タル証據アル、非ズシテ自ラ辨濟ヲ止メタル商賈ノ摸樣、

第一ノ場合〇第一ノ場合ニ付テハ必ス左ノ諸件ヲ規定スルヲ要ス

甲、動産、不動産、債主權、國債證書又ハ恩施金等ニ関スル諸多ノ場合ニ於テ差押ヲ為スニ付キ用フ可キ定式(別段ノ法則ヲ以テ已ニ右等ノ事ヲ禁止セサル場合ニ限ル)、

乙、差押ヘタル物件ヲ欺隠スル丁及ヒ其他權利者ヲ害ス可キ詐偽ヲ避クル為メニ定ム可キ豫防規則、

丙、差押ヘタル物件ノ賣拂ヲ為ス方法、

丁、賣拂ヲ為シテ得タル金高ヲ諸多ノ權利者ニ配附スル事、

第二ノ場合〇第二ノ場合ニ於テハ別ニ財産ノ特別ナル差押ヲ為ス丁ヲ廃シ且ツ各權利者ノ別々ニ訴訟ヲ為ス丁ヲ止メ、唯義務者ヲシテ其財産ヲ管理スル丁ヲ止メシメタル上裁判所ニ於テ其財産及ヒ負債ノ總筭計ヲ行フ方法ヲ用フルヲ可トス、

第三ノ場合〇第三ノ場合(即チ家資分散)ニ於テハ其筭計ヲ為スニ付キ第二ノ場合ト同様ナル方法ヲ用フ可シ、此場合ハ元來商法ニ規定ス可キモノナレハ爰ニハ唯之ヲ指示スルニ過キサルノミ

第一ノ場合○真ノ差押ヲ行フ可キハ特ニ第一ノ場合ノミニ限ル

第二及ヒ第三ノ場合○第二ノ場合及ヒ第三ノ場合ニ於テハ義務者既ニ已レノ財産ヲ管理スルヿヲ止メラレタル後ナルガ故ニ別段各財産ニ付キ純正ノ差押ヲ為スヲ要セサルナリ、唯動産、不動産、商品及ヒ其他ノ財産ニ付キ用フル公賣ノ規則ヲ適施スルヲ以テ足レリトス、且ツ賣拂ヲ為シテ得タル金高ヲ各権利者ノ有スル権利ノ割合ニ従ヒ配附スル為メニ用フル規則所謂ル割合配附又ハ特権若クハ書入質アル各権利者ノ順序ニ従ヒ右ノ金高ヲ配附スル為メニ用フル規則順序ノ手続等モ亦均シク之ヲ適施ス可シ

第一ノ場合○第一ノ場合ニ付テ差押ノ事ヲ規定スルニハ佛蘭西成典ニ記載アル保存差押ヲ一層擴張スルヲ以テ適当ナリト思考ス、佛蘭西成典ニ定メアル保存差押ヲ実際ニ適施スル場合ハ実ニ僅少ナリトス○去レドモ此事ニ付テハ余リ過当ニ失セサル様注意ヲ為サヽル可カラズ、如何トナレバ若シ其度ヲ誤レバ大ニ義務者ノ自由ヲ害スルノ恐レアルカ故ナリ○義務者ニ對シテ執行力ヲ有スル証書アルニ非ズ且ツ真ニ其負債アルヿヲ確認セサル場合ニ於テハ漫リニ其義務者ノ所有物ヲ自ラ處置スルノ權ヲ害ス可カラサルナリ

苐二ノ場合〇倒産ノ場合ニ於テハ尚ホ一層注意ヲ為サヽル可カラズ〇佛蘭西成典ノ規定スル所ハ太タ不完全ナリ、佛蘭西法ハ或ル場合ニ付テハ之ヲ家資分散ト同様ニ規定セリ、但シ其規定スル所ト雖モ亦單ニ特別ノ法則ノミニ過キサルナリ〇民法苐千六百十三条、苐千八百六十五条、苐二千三条、苐二千三十二条参觀〇判決例ニテハ家資分散ノ規則中其若干ヲ採リテ倒産ノ場合ニ適用シ以テ右ノ不足スル所ヲ補充セシヿ屡々之アリ、其一例ヲ示サンニ期限アル負債ヲ直ニ要求スルヲ得ルガ如キ規則ハ倒産ノ場合ニモ亦等シク之ヲ引用シタルヿ有リ、然レ氏無資力ナル義務者ヲシテ其財産ノ管理ヲ止メシメ以テ之ヲ其権利者等ノ代理人ニ任スルガ如キ判決ハ敢テ之ヲ有シ能ハサル可キナリ〇蓋シ假定失踪ノ場合ニ用フル規則ヲ引用シ以テ裁判所ヨリ管財人ヲ任スルハ特リ其義務者ノ逃亡シタル場合ニ限ル可キカ故ナリ

法律ノ草按ニハ必ス此欠漏ヲ補充セサル可カラズ

玆ニ難累ナル所ハ真ニ無資力タルヿヲ認定スルニ在リ〇若シ必スシモ其無資力タルヿノ判然スルヿヲ待ツヲ要スルトセハ或ハ其財産ヲ保存スル為メノ方法ヲ施スニ当リ既ニ時機ヲ失スルノ恐レアリ、其残ル所ハ僅カニ少々ノ財産ニ過キサル場合モアル可ク、或ハ莫大ノ負債

トナリタル場合モアル可シ○又他ノ点ニ付テ
之ヲ観ル時ハ義務者ニ對スル一個若クハ数個
ノ執行力ヲ有スル証書アルヲ以テ敢テ其無資
力タルヿヲ詳明スル充分ノ証據ナリト為ス可
カラズ、如何トナレバ至極僅少ナル金高ニ付テ
モ亦此ノ如キ諸多ノ証書アル場合ナキヲ保シ
難キカ故ナリ○玆ニハ特ニ彼ノ民法草按ニ於
テ已ニ規定アル原則ヲ当行スルヲ得可シ（第四
百二十五葉第二号）即チ、義務者其財産ハ中大部
ヲ他ニ移轉シタル場合又ハ其財産ノ中大部ガ
既ニ差押ラレタル場合是ナリ
一旦無資力タルヿヲ証定シタル以上又ハ充分
ニ其無資力タルヿヲ推定シタル以上ハ必ス又

司法省

其財産及ヒ負債ノ善計ハ何人ニ之ヲ任シテ為
サシム可キカヲ明示セサル可カラズ
此点ニ付テハ左ニ記スル二個ノ難累ヲ避クル
ヿヲ必要トス
第一、若シ裁判所ノ吏員ヲシテ之ニ預カラシ
ムルトセハ此吏員ハ必ス豫メ規定アル法式ニ
循テ其處分ヲ為ス可ク且ツ其自ラ管理スル財
産ニ付テ相当ノ賃料ヲ受ク可シ、故ニ其財産ノ
中大部ハ彼是入費ノ為メニ消尽スルニ至ル場
合ナキヲ保シ難シ、佛蘭西ニテハ家資分散ノ場
合ニ於テ此ノ如キ事アルヲ見ルハ実際敢テ其
例ニ乏シカラサルナリ、管財人、管理人等ニシテ
諸多ノ権利者及ヒ其分散人ノ被ムル損害ヲ顧

司法省

ミズ速カニ已レノ利ヲ圖ル者実際屡々之レアルヲ免カレズ

第二、又重立タル權利者ノ中一人若クハ二人立會ノ上區長或ハ郡長ニ任シテ其弁計ヲ為サシメンカ、困難ニシテ且ツ別段ノ見識ヲ要スル事柄ヲ本来法律ヲ知ラサル者ニ任スルノ恐アリ、且ツ若シ果シテ然ランニハ嘗テ裁判所ノ手ヲ借ラズシテ行フタル事件ヲ更ニ裁判所ニ持出シ以テ其矯正ヲ請ハサル可カラサル場合ニ至ルヿ実ニ尠カラサル可シ、是レ事件ハ處分ヲ遅滞シ、且ツ夥多ハ費用ヲ要スル由縁ナリ

右ニ示シタル二個ノ難事ヲ悉ク除去セントスルハ得テ及フ所ニ非ズト雖モ幾分カ之ヲ調和スル為メニ其折衷ノ方法ヲ設定セサル可カラズ

倒産ノ場合ニ於テ弁計ヲ為スニ付テハ必ス右ノ外更ニ諸多ノ難累ヲ現出スルヲ免レサル可シ、其難累ニ付テ相当ニシテ且ツ要益ナル處分ヲ為サント欲セハ唯既ニ知レタル諸多ノ權利者ヲ配附ヲ為ス時又ハ順序ヲ定ムル時ニ呼出スヲ以テ充分ナリト為ス可カラズ、其未タ知レサル權利者ト雖モ公告又ハ掲示ニ因リ已レヲ知ラシムル為メノ方法ヲ施サヽル可カラズ、又其義務者ト多少遠近スル土地ニ住居スル權利者ノ為メニハ相当ノ期限ヲ定ム可ク、且ツ其期限ノ経過スルニ至ル迄已レヲ知ラシメサル權

利者ノ摸様ヲ處理スル為メニモ亦適当ノ規則ヲ制定スルヲ要スルナリ

且ツ共同ノ利益ヲ圖ルニ付キ要益ナル處置ヲ施ス為メニ權利者等ノ互ニ協議ヲ為ス方法ヲ規定ス可ク又將来ノ為メニ義務者ノ摸様如何ヲ明定セサル可カラス仮令ヒ一旦其義務者ニ属スル總テノ財産ヲ賣拂フタル後ト雖モ其義務者尚ホ残額ニ付テ義務ヲ擔当スルヿ有ル可キナリ

佛蘭西ニ於テハ幸ニシテ家資分財ノ法則ヲ以テ多少右等ノ難題ヲ決定セリ

日耳曼ノ思想ヲ以テ設定セラレタル商法ノ草按ハ無論余ガ述フルガ如キ方法ニハ非サル可

司法省

ク必ス他ノ方法ヲ以テ其法則ヲ設ケタレヤ敢テ疑ハサル所ナリ

今純然タル民事上ニ係ル義務者ノ倒産ニ付テ法則ヲ設ケントスルニハ右二外國ノ法律中彼ヲ採ラントスル乎將タ之ヲ摸セントスル乎

是レ余ガ草按ヲ起スノ前敢テ豫メ司法卿閣下ノ高案ヲ伺カントスル大切ナル要点ナリ此草按ヲ為スハ素ヨリ容易ノ業ニ非サル可シ純粋ノ訴訟手続ヲ設クルヨリモ尚ホ一層ノ難累アルヲ免カレサルヤ必然ナリ

千八百八十二年十月三日

東京ニテ

ゼ、ボワソナード

司法省

差押及ヒ倒産ニ関スル法律ノ草按

第一部　差押ノ事

前加規則（執行差押ニ関スル総則）

第一條　執行差押ハ裁判言渡書ノ所持人又ハ何年何号ノ布告ニ定メアル如ク執行ノ定式ヲ具備スル公正證書ノ所持人ノミニ限リ之ヲ允許スル者トス

第二條　故障ヲ申立ルコヲ得可キ裁判言渡（欠席裁判言渡）又ハ控訴ヲ為スコヲ得可キ裁判言渡（始審裁判言渡）ハ其敗訴者本人ニ又ハ其者ノ住所ニ之カ告知ヲ為シタルヨリ一八日間ヲ経タル後ニシテ且ツ此期限中ニ其上訴ヲ為サヽリシ時ニ非サレハ（書記）執行ノ定式

ヲ之ニ附ス可カラス、但シ訴訟法ノ規則ニ循ヒ故障又ハ控訴ノ如何ンニ拘ハラス裁判言渡ヲ以テ假リノ執行ヲ允許スル場合ハ此限リニ在ラス

第三條　右八日間ノ期限ヲ經過シタル後被告人故障ノ申立ヲ為スカ又ハ控訴ヲ為ス時ハ自ラ其上訴ヲ為シタル旨ヲ證明シタル上其執行ニ付テ故障ヲ述フル丁ヲ得可シ

故障ノ申立ヲ為ス時ハ直ニ其訴訟ヲ停止スル者トス、而シテ諸事皆其保存ニ為シ置ク可シ

但シ原告人ハ裁判所長ニ請フテ急速吟味ヲ為サシメ以テ右故障申立ノ有効ナルヤ否ヤヲ決定セシムル丁ヲ得可シ

第四條　法律ニ允許アル場合ノ外ニ於テ裁判言渡ヲ以テ假リノ執行ヲ命シタル時尚ホ其上訴ヲ為ス丁ヲ得ルニ於テハ被告人自ラ右ノ上訴ヲ為スニ非サレハ其執行ニ付テ故障ヲ述フル丁ヲ得ス、但シ差押ハ其上訴ニ付キ決定ヲ為スニ至ル迄保存ノ名義ニテ之ヲ履行スル丁ヲ得可ク之ヲ維持スル丁ヲ得可シ

第五條　公證人ノ手ヲ經テ記シタル證書アリト雖モ正確詳明ニシテ且ツ要求スルヲ得可キ物件又ハ金額ヲ目的トスル義務若クハ約諾ヲ記シタルモノニシテ且ツ公證人ノ適正ナリト確認シタル寫ニ其公證人ノ職務ヲ行フ土地ノ管轄内ニ在ル民事裁判所ノ書記執

修正アリ

行ノ定式ヲ附シ以テ其裁判所長ノ験真ヲ為シタル場合ニ非サレハ執行差押ヲ為スコヲ得ス

第六條 急速吟味ヲ為ス時ハ裁判所長其執行ノ定式書ヲ引渡ス時ヨリ満三日以前ニ其執行ノ被告人ヲ呼出ス可シ

右ノ被告人出頭セサリシ後ハ最早ヤ其差押ニ付ト故障ヲ述フルコヲ得ス然レモ其財産ノ賣拂ニ付テ故障ノ申立ヲ為スコヲ得可シ

但シ此場合ニ於テハ其執行命令ニ関スル法律上ノ條件ヲ欠失アルコヲ證明スルカ又ハ已レニ對スル證書ニ付キ詐偽ノ申立ヲ為スコヲ必要ナリトス

第七條 總テ執行差押ヲ為ス時ハ豫メ其辨済ヲ行フ可キ旨又ハ執行ヲ為ス可キ旨ヲ記シタル要決書ヲ差出スヲ要ス而シテ之レト其ニ其原告人ノ身分、執行力アル證書ノ性質ヲ指示ス可ク、且ツ之ニ記載アル主要ノ諸件就中證書ノ日附、関係人ノ名前并ニ供給ス可キ物件及ヒ其辨済ノ期限等ヲ記シタル寫ヲ右ノ要決書ト共ニ差出ス可シ

第八條 要決書及ヒ執行差押ハ總テ其原告人ノ求メヲ受ケタル書記又ハ書記局吏員ノ中一人ニテ之ヲ為ス可シ

第九條 請求者ハ初度ノ入貫ヲ前拂ニテ書記局ニ附記ス可ク、且ツ其吟味中右ノ入貫ニテ

不足ナル時ハ其補足入費ヲ差出ス可シ但シ賣拂ニ因リテ得タル金額ヲ以テ已レニ返償セシムルヿヲ得可シ

第七條（修正）總テ執行差押ヲ為ス時ハ豫メ其辨済ヲ行フ可キ旨又ハ執行ヲ為ス可キ旨ヲ記シタル要決書ヲ以テ其者又ハ其者ノ住所ニ其告知ヲ為スヲ要ス而シテ之ト共ニ其請求者本人ノ身分又ハ其申立タル權利ノ讓受人若クハ遺物相續人ノ身分ヲ指示ス可シ若シ執行力アル證書ノ送達ヲ被告人ニ為サヽル前ナル時ハ右ノ要決書ト共ニ其執行力アル證書ノ性質ヲ指示ス可ク且ツ之ニ記載アル主要ノ諸件就中證書ノ日附関係人ノ名前並ニ供給ス可キ物件及ヒ其辨済ノ期限等ヲ明示スルヲ要ス

第十條 若シ訴訟ヲ為ス者其執行ヲ為ス可キ邑内ニ住居セサル者ナル時ハ必ス其邑内ニ特別ノ住居ヲ選定スルヲ要ス
訴訟ヲ受ケタル者ハ實物ノ提供ヲ為ス時ト、其執行ニ付キ故障ヲ申立テルカ又ハ異議ヲ申述ヘル時トヲ問ハス權利者ノ選定シタル住所ナルカ又ハ權利者ノ有スル眞ノ住所ナルカ隨意ニ其中ノ一ヲ選テ之ニ其旨ヲ告知スルヿヲ得可シ、又裁判言渡ノ執行ヲ要メラレタル時之ニ對シテ行フ上訴ノ告知モ亦右ノ住所ニ之ヲ為スヿヲ得可シ

第十一條 裁判言渡及ヒ公正證書ノ執行ニ關スル諸多ノ問題ハ其執行ヲ為ス可キ土地ノ民事裁判所ニテ之ヲ裁判ス可シ

文義ノ

第十二條 執行力ヲ有スル證書ノ意味及ヒ其廣狹ニ付テ異論ヲ生スル時、其裁判言渡ニ關スル場合ニ就テハ之ヲ言渡シタル裁判所ニテ其解釋ヲ為ス可ク、其公正證書ニ關スル場合ニ於テハ被告人ノ住居スル土地ニ在ル裁判所ニテ其解釋ヲ為ス可シ

第十三條 原告人ハ要求書ノ時ニモ又差押ノ時ニモ自ラ立會ヲ為スヿヲ得ス

第一章　差押ユ可カラサル物件

第十四條　諸官員及ヒ政府ノ雇吏、官廳ノ吏員并ニ陸海軍ノ將校等ニ授與スル給料、褒賞金又ハ賃料等ハ必ス特別ノ布告ニ因リ定メアル原由及ヒ部分ニ循ハサレバ之ヲ差押ユルコヲ得ズ

政府又ハ官廳ヨリ支拂フ可キ恩施金、退隱料其他之ニ類スルモノニ付テモ亦右同様ナリトス

第十五条　左ノ諸件ハ差押ユ可カラサルモノナリ

第一、常備中ニ在ルト預備中ニ在ルトヲ問ハズ陸海軍將校ノ衣服其他帯身ノ諸件、

司法省

第二、生存中ナルト死後タルトヲ問ハズ退
隱シタル將校ノ刀釼
第三、本國又ハ外國ノ勲賞又ハ其他名譽ノ
表証、皇帝若クハ官廳其他眞正ノ會社等ヨ
リ授與シタル刀釼又ハ賞牌
第四、差押ヲ為ス時ニ其差押ヲ受クル者及
ヒ其家族ノ着用スル衣服但シ詐偽ヲ行ハ
ズシテ着用スル衣服ノミニ限ル
第五、差押ヲ受クル者ノ臥床、之レト同居ス
ル家族ノ臥床又ハ假令ヒ同居セズト雖モ
其差押ヲ受クル者ヨリ食料ヲ給與スル親
族ノ臥床、
第六、本人及ヒ其家族ノ一月間用フルニ充
分ナル最要ノ飲食器
第七、裁判所ノ命令ニテ附與シタルト贈與
又ハ遺囑ニテ他ヨリ得タルモノナルトヲ
問ハズ總テ食料ニ充ル債主權又ハ其他ノ
食物
第八、本人ノ未タ發行セサル自筆書類學藝
上ニ係ル未定ノ諸件、其家族中ニ関スル書
面及ヒ其他ノ書類
第九、本人ノ職務ヲ執行スルカ為メニ必要ナ
ル書籍又ハ學藝上ノ器械其他ノ器具但シ
其價五十圓ニ至ルマテニシテ且ツ本人ノ擇
シニ任ス可シ後段第十七条ニ定メアル規
則ハ右ノ限リニ在ラズ

第十、別段詐偽ヲ行フタルニ非ズシテ直接ニ其家ノ神佛又ハ死者ノ為メニ用フ可キ諸件

第十一、右ノ外特別ノ法律又ハ双方ノ約束ヲ以テ差押ユ可カラサルモノト定メタル諸件

第十六條 民法第十条ノ規則ニ固リ用方ノ不動産ナリト定メラレタル動産物ハ必ス其附着スル不動産ト共ニ差押ヲ為スニ非サレハ特別ニ之カ差押ヲ為スヿヲ得ズ

但シ右等ノ物件ノ辨濟ヲ受ケサル賣主又ハ自己ノ入費ヲ以テ之ヲ修繕シ若クハ保存シタル者ハ之カ差押ヲ為スヿヲ得可シ

第十七条 差押ヲ受ケタル者自己ノ素性物ヲ以テ製造ヲ為ス工丁ニシテ其器具第十五条第九号ニ定メアル五十圓ノ價ニ不足スル時ハ裁判所ニ請フテ急速吟味ヲ為サシメ以テ自ラ保有スル素性物ヲ以テ其五十圓ノ不足高ヲ補充セシムルヿヲ得可シ

第十八條 又裁判所ニテハ其差押ヲ受ケタル本人ノ請要ヲ為シタル時其事実ノ摸様ヲ量リ家族ノ需要ニ必要ナル金高ヲ其差押ヘラレタル本人ノ財産中ヨリ引去ルヿヲ允許スルヲ得可シ但シ其金高ハ差押人ノ有スル權利ノ十分一ヲ超過ス可カラズ又何レノ場合ト雖モ五十圓ノ金高ヲ超過ス可カラズ

第十九条　船艦及ヒ其他ノ舟類ヲ差押ユル為メニ用フ可キ規則ハ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム可シ

第二章　動産差押ノ事

第十九条ノ二　動産ノ差押ハ第九条ニ規定アル要決書ヲ為シタルヨリ二十四時間ヲ経タル後ニ非サレバ之ヲ行フコトヲ得ズ

右ノ要決書ヲ為シタル後三ケ月内ニ其差押ヲ行ハサル時ハ原告人ノ費用ヲ以テ其要決書ヲ更新スルヲ要ス

第二十条　欠席裁判言渡又ハ始審裁判言渡ニ因リ要決書ヲ為シタル時故障申立人又ハ控訴原告人其裁判言渡ニ對シテ起シタル上訴ニ付キ敗訴シタルニ於テハ被告人ノ費用ヲ以テ其要決書ヲ更新スルヲ要ス

司法省

第二十一条 若シ要決書ヲ為シタル後ニ被告人死去スルト雖モ別段其要決書ヲ更新スルニ及ハズ其遺物相續人ニ付テ差押ヲ為スヿヲ得可シ但シ第二十三条ニ規定スル所ハ此限ニ在ラズ

第二十二条 差押ヲ受ケタル本人又ハ其住所ニ一個ノ要決書ノ告知ヲ為シタル以上ハ其者ニ屬スル動産ガ何レノ場所ニ在ルヲ問ハズ悉ク其差押ヲ為スヿヲ得可シ

第二十三条 義務者ノ不在ナルト否トヲ問ハズ其住所ニ於テ差押ヲ為ス時又ハ其住所以外、義務者ノ現ニ在ル場所ニ於テ差押ヲ為ス時ハ前ノ要決書ノ通リニ更新シタル一ノ要決書ヲ豫メ差出スヲ要ス

右ノ要決書ハ差押ノ調書ニ之ヲ記入ス可シ且ツ竟ニ充分満足ノ答ヲ得サルニ於テハ直ニ其差押ヲ為ス可シ

第二十四条 差押ハ日出ノ前又ハ日没ノ後ニ之ヲ為スヿヲ得ズ

第二十五条 書記又ハ其下役補官差押ヲ行フ為メニ其場所ニ至リタル時其家屋ノ戸口ヲ總テ閉チテアルカ又ハ家中ニ立入ルヿヲ拒ム者アル場合ニ於テ若シ其財産ヲ欺隠スルノ恐レアル場合ニ於テハ各出入口ニ番人ヲ置クヿヲ得可シ、然ル後右ノ書記等ハ其地方ノ警察使若クハ其他ノ警察長ニ請求スルカ又ハ此等ノ吏

司法省
司法省

負アラサル時ハ其地方ノ邑長ニ請求シ以テ其家ノ内外ニ在ル出入口及ヒ閉チタル動産物等ヲ開カシムル為メニ立會ヲ為サシムル丁ヲ得可シ

差押ノ調書ニハ總テ右等ノ事柄ヲ附記スルヲ要ス、且ツ右ノ請求ヲ受ケタル吏員ハ書記ト共ニ已レノ姓名ヲ手署ス可シ

第二十六条 前条ニ規定アル場合ノ外ニ於テ書記其差押ヲ受ケタル本人、其家族又ハ其家僕等ヲ家中ニ見出サヽル時又ハ右等ノ者其家中ニ在リト雖モ其者幼者ナルカ、婦人ナルカ、不具者ナルカ若クハ病者ナル時ハ証人二名ノ立會ヲ請求スル丁ヲ得可シ、而シテ此証人ハ右ノ書記ト共ニ自已ノ姓名ヲ調書ニ手署スルヲ要ス、此場合ニ於テハ其調書ノ寫ヲ邑長ニ渡ス可シ

第二十七条 差押ハ大概之ヲ行フ原由ニ比適ス可キ價額ヲ有スル物件丈ケニ之ヲ限ルヲ要ス

其家中ニ現在シテ差押ユルヲ得可キ總テノ諸件ヲ悉皆差押ヘサル時ハ差押ヲ受ケタル者其差押ヲ為ス可キ物件ヲ自ラ選ムヿヲ得可シ

第二十八条 差押ヘタル物件ノ大要ヲ記示スルヲ必要トス、商品等ハ悉ク其性質ニ從ヒ之カ重量ヲ示シ、之カ負数ヲ算シ、又ハ之カ長短ヲ

之ヲ第二十九条ト為シ次ヲ第三十条ト為スリ

記載ス可シ
若シ金額其他ノ入額物ガ現在スル時ハ其種
類並ニ其員数ヲ弁定ス可シ
書記ハ右等ノ諸件ヲ「ナートル、ヲ、ポルツール」
為替手形ノ類珍重物其他ノ貴重ナル品物ト
共ニ箱類又ハ其他鍵ヲ以テ出入スル物品ノ
中ニ入レ置ク可シ、而シテ書記ハ其箱等ニ封
印ヲ為シ且ツ其鍵ヲ保存ス可シ
又書記自ラ必要ナリト思考スル時ハ右等ノ
物件ヲ悉ク引取リ以テ之ヲ書記局ニ附託ス
ルヲ得可シ

附陳前ノ第二十八條ハ第二十九条ト為ス可シ

第二十八条　家中ニ在ル總テノ物件ニ付キ差押
ヲ行フ時第何条及ヒ第何条ニ因リ差押ユ可
カラズト定メラレタル物件ノ一個又ハ数個
アルニ於テハ之ヲ其差押ヲ受ケタル者ニ残
シ置キタル旨ヲ調書ニ附記ス可シ

第三十条　書記ハ差押ヲ為シタル後其差押ヘタ
ル物件ノ番人ヲ定メ置ク可シ、但シ其差押ヲ
受ケタル本人、其家族ノ中一人、又ハ其家僕ノ
中一人ヲ以テ右ノ番人ト為スコヲ得
真正ニ資力ヲ有セザル者又ハ官廳ノ吏員タ

ル者ハ其差押ヲ受ケタル者及ヒ差押人ノ承諾アルカ又ハ書記責任ヲ擔當シタル以上ニ非サレバ之ヲ差押ノ番人ト為スヿヲ得ズ
何レノ場合ト雖モ差押人、其四等親ニ至ル迄ノ血屬親、又ハ姻屬親、及ヒ其家僕等ハ必ス其差押ヲ受ケタル者ノ承諾ヲ得タル以上ニ非サレバ之ヲ右ノ番人ト為スヿヲ得ズ
調書ニハ必ス其番人ノ姓名及ヒ身分ヲ附記スヿ可ク、且ツ若シ之ニ付テ承諾ヲ求メタル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第三十一条 若シ一日内ニ差押ヲ為スヿ能ハサル時ハ書記其財産ヲ欺隠スルヿヲ防リ為メニ翌日ニ至ル迄假リノ番人ヲ定メ置ク可シ、但シ其差押ノ調書ヲ記スルヿヲ中絶シタル所ニ其旨ヲ附記スルヲ要ス

第三十二条 差押ヲ受ケタル者又ハ其家族ノ中重立タル人ニシテ其差押ヲ為ス時現ニ在リタル者ハ其調書ニ姓名ヲ手署ス可キ求メヲ受ク可シ、但シ右等ノ者之ヲ拒否スルカ又ハ之ヲ為スヿ能ハサル時ハ必ス其旨ヲ附記スルヲ要ス

第三十三条 差押ヲ受ケタル本人現在スル時ハ之ニ其調書ノ寫ヲ渡ス可シ、若シ其現在セサル時ハ右ノ寫ヲ以テ其者又ハ其者ノ住所ニ告知ヲ為ス可シ

第三十四条 左ノ場合ニ於テハ書記自ラ其責任

ヲ擔當シタル上其差押ヲ停止スルカ又ハ之ニ拘ハラズ其差押ヲ為スヿヲ得可シ

第一、書記差押ヲ行ハントスル時其家中ニ在ル者其差押ヲ受ケタル者ノ住所又ハ寄留所ハ此家ニ非サル旨ヲ述ヘルカ、又ハ其所ニ在ル或ル動産ハ右ノ差押ヲ受ケタル者ニ屬セサル旨ヲ述ヘタル場合、

第二、被告人ヨリ原告人ノ姓名ヲ手署シタル証書ヲ差出シタルニ因リ之ニ據テ其訴訟ノ原由ガ已ニ消滅シタル証アルカ、又ハ原告人ノ右証書ニ姓名ヲ手署スル時及ヒ調印ヲ為ス時ニ立會ヲ為シタル証人二名ニテ其証書ノ真正ナルヿヲ確証シタル場合

第三、欠席裁判ノ言渡又ハ始審裁判ノ言渡ヲ受ケタル被告人未タ法律上ノ期限中ニ在リテ其故障ヲ申立ント述ヘタル場合、

第三十五条 前条ニ記載アル第一及ヒ第二ノ場合ニ於テ故障ヲ申立タル者其附属吟味ヲ為サシムルタメニ三日間ニ書記局ヲ経テ其土地ニ在ル民事裁判所ニ差押人ヲ呼出サヽル時ハ直ニ右ノ停止ヲ解キ以テ其差押ヲ執行ス可シ

第三ノ場合ニ於テハ故障ノ申立又ハ控訴ハ其裁判ヲ言渡シタル裁判所ノ書記局ニテ八日内ニ之ヲ更新スルヲ要ス、且ツ其訴訟ヲ為ス書記ニ其理由ヲ詳明ス可シ

第三十六条 若シ差押ヲ為ス時其被告人又ハ其他ノ者ヨリ其家中ニ在ル物件ノ中一個又ハ数個ガ差押ヲ受ケタル者ニ属セサルニヨリ之ヲ他ノ物品中ヨリ引去ランヿヲ要求シタル場合ニ於テハ書記其申立タル證據ノ性質ニ因リ又ハ其事実ノ推側ニ従ヒ右ノ要求ヲ允許スルカ又ハ之ニ拘ハラズ其差押ヲ為スヿヲ得可シ

第三十七条 他人ハ仮令ヒ差押ヲ為シタル後ト雖モ其財産ヲ賣拂フ時ニ至ル迄右引去リノ要求ヲ為スヿヲ得可ク又賣拂ヲ為シタル時ト雖モ差押人ニ金額ヲ渡スニ至ル迄右ノ要求ヲ為スヿヲ得可シ但シ糶賣ノ買受人ハ之カ為メニ取戻ノ訴ヲ受クルヿ無ル可シ

司法省

附加シタル箇条及ヒ修正シタル箇条

第十二条ノ終リニ又ハ選定シタル住所云々ナル語ヲ加フ可シ

第十九条ノ船艦ニ関スルモノハ之ヲ消除ス可シ別ニ他ノ章ヲ設ケテ之ヲ規定スルヲ可トス

第三十何条ノ次ニ左ノ一条ヲ設ク可シ

第何条○前条ニ規定アル二個ノ場合ニ於テハ新ノ差押ヲ其差押ヲ受ケタル者及ヒ最初ノ差押人ニ報知ス可シ

司法省

若シ最初ノ差押人其差押ヲ止メタルカ又ハ其期限ヲ延ハス丁ヲ允許シタル時ハ新ノ差押人ハ別段其代位ノ權ヲ得ル丁ヲ要セズシテ自己ノ名義ニテ其賣拂ヲ為サシメル丁ヲ得可シ

新ノ箇条 若シ金銀ニテ細工シタル物品又ハ宝石等ハアル時ハ鑑定人ノ評價シタル真價等ヲ明細ニ定メタル上特別附記ヲ為シテ其掲示ヲ行フ可シ

右等ノ品物ハ其評定シタル價ヨリ以下ニ糶賣スルヲ得ス、但シ若シ其價ヨリ以下ニ糶賣シタル時ハ書記其差押人及ヒ差押ヲ受ケタル者ニ對シテ其責ニ任ス可シ

司法省

第三十八條財産ノ利分ケノ要求ヲ為ス場合ニ於テハ第三十何条ニ定メアル如ク決定ヲ為サレムル為メニ故障申立人ヨリ三日内ニ其差押人ヲ管轄裁判所ニ呼出サシムル可シ但シ此規則ニ背ク時ハ引續テ其差押ヲ行フ可シ

第三十九条差押ヘラレタル物件ノ中一個又ハ數個ニ付キ單ニ未分ノ権利ヲ有スルト申立ル他人ハ其賣拂ニ因リ得タル代金ニ付キ已レノ権利ヲ算計センヿヲ承諾スルヿヲ得可ク又其物件ガ分派スルヲ得可キ性質ヲ有スル時ハ賣拂ヲ為ス前ニ豫メ其分派ヲ行ハンヿヲ要求スルヲ得可シ

第四十条書記第一ノ差押ヲ為シタル後新ニ発

顕シタル原由アルニ因リ同一ノ差押人ノ為
メ又ハ他ノ差押人ノ為メニ、同一ノ財産ニ付
キ第二ノ差押ヲ行フ可キ要求ヲ受ケタル時
ハ唯其要決書ヲ為シ且ツ第一ノ差押ヲ証明
スル調書ヲ記スルノミヲ以テ足レリトス
差押ユ可キ物件尚ホ存在スル時ハ書記之ヲ
差押ヘ以テ前キノ番人ニ之ヲ委託ス可シ、但
シ右ノ番人第何条ニ規定アル条件ヲ履行セ
サル時ト雖モ亦同様ナリトス
第四十一条 新ニ差押ヘタル物件ハ最初ノ物件
ト共ニ之ヲ賣拂フ可シ、但シ第四十三条ニ規
定アル八日ノ期限ヲ守ル了能ハサル場合ト
雖モ亦右同様ナリトス

然レ𪜈新ニ差押ヲ為シタル物件ノ價額ガ最
初ニ差押ヘタル物件ノ價額ヲ超過スル時ハ
第二ノ差押ハ第一ノ差押ニ之ヲ合併ス可リ、
且ツ番人ノ身分ニ関シテ定メアル条件及ヒ
賣拂ノ為メニ定メアル期限等ハ悉ク之ヲ守
ル可シ
第四十二条 若シ書記其被告人ノ住所カ又ハ其
原告人ヨリ指示シタル場所ニヘモ差押ヲ為
ス可キ物件ヲ見付ケサル時ハ財産ノアラサ
ル旨ヲ調書ニ記ス可シ（プロセウェルバール、ド、
カランス、ウ、ド、子アン）
若シ第何条ニ因リ差押ヲ受ケタル者又ハ其
家族ノ者ニ残シ置ク可キ物件アル時ハ必ス

亦其旨ヲ附記ス可シ

第四十三条 要益ナル差押ヲ為シタル時ハ書記其賣拂ヲ為ス日ヲ調書ニ指示ス可シ、差押ヲ受クル者ノ現在スル時ニ之ヲ行フタル場合ニ於テハ其時ヨリ八日以内ニ右ノ日ヲ定ム可カラズ、又其者ノ現在セサル時ニ差押ヲ行フタル場合ニ於テハ本人又ハ其住所ニ告知ヲ為シタル時ヨリ八日以内ニ右ノ日ヲ定ム可カラズ

第四十四条 賣拂ハ書記又ハ其補官ノ中一人ニテ公然糶賣ノ方法ヲ以テ之ヲ行フ可シ

右ノ賣拂ハ其差押ヲ受ケタル者ノ住所ニテ之ヲ行フカ又ハ此等ノ賣買ヲ為スニ付キ豫テ行政上ニテ定メアル場所ニテ之ヲ行フ可シ

右ノ賣拂ハ祭日ト雖モ之ヲ為スヿヲ得可シ

右賣拂ノ事ハ邑廳、治安裁判所ノ門前及ヒ其賣拂ヲ為ス可キ場所ニ少ナクトモ二日以前ヨリ掲示ヲ為シテ之ヲ廣告ス可シ

且ツ其地方内ニ一ノ新聞紙アル時ハ之レニモ亦其廣告ヲ為ス可シ

第四十五条 賣拂ヲ為ス日ニハ書記其差押ヘラレタル總テノ物件ノ有無ヲ取調ヘ調書ノ目録ト物件トヲ照合セル事ナリタル上賣拂ノ調書ヲ開キ以テ差押人ノ姓名、差押ヲ受ケタル者ノ姓名ヲ記載シ且ツ要決書ノ日附、差押

司法省

ノ日附、正当ニ行フタル告知ノ日附及ヒ其法
律ニ循テ行フタル掲示ノ日附書ヲ附記ス可
シ

第四十六条 賣拂ハ必ス其差押人ノ允許シテ之
ヲ停止シタル時カ、又ハ差押ヲ受ケタル者ガ
其差押ヲ為シタル總テノ原由ニ付キ充分ノ
滿足ヲ與ヘサルヿヲ記シタル書証アル時ニ
非サレハ之ヲ止ムルヿヲ得ズ
若シ差押人現ニ在リテ其承諾ヲ為サヽル時
ハ其允許シタル賣拂ノ停止ヲ記シタル私証
書又ハ右滿足ノ意ヲ表シタル私証書ハ第三
十二条ニ定メアル如ク証人二名ノ確認ヲ為
シタル場合ニ非サレハ之ヲ採用スルヿヲ得
ス

第四十七条 糶賣ノ買受人ハ總テ即金拂ニテ其
代金ヲ辦済ス可シ、但シ公証人自ラ其責ニ任
シテ之ニ猶豫ノ期限ヲ與ヘタル時ハ此限ニ
在ラズ
若シ糶賣ノ買受人直ニ其代金ノ高ヲ拂フヿ
能ハサル時ハ其物件ハ直ニ再糶賣ニ掛ルカ
又ハ其賣買ノ濟ミタル後ニ再糶賣ニ出ス可
シ、而シテ再度ニ行フタル糶賣代金ノ高最初
ニ行フタル糶賣代金ノ高ニ達セサル時ハ高
キ直段ニテ買受ケル者其代金ノ差ヲ拂フ可
シ

第四十八条 些細ノ物件ハ直ニ之ヲ引渡ス可シ

重大ナル物件又ハ数多ノ物件ハ其賣買ノ終ハリニ至リ之ヲ引渡スヿヲ得可シ

第四十九条 差押ヲ為シタル者一人アル場合ニシテ且ツ其賣拂ニ因リ得タル金高ニ付キ他ノ権利者ヨリ別段故障ヲ申立サル時ハ、書記先ツ急速吟味ニ因リ償却ヲ得サリシ入費ノ高ヲ引去リタル後、其差押ヲ行フ可キ原由ニテ拂フ可キ高及ヒ其差押人ノ前拂シタル入費ノ高ニ至ル迄其賣拂ニテ得タル金高ヲ直ニ右ノ差押人ニ渡ス可シ

第五十条 若シ差押ヲ為シタル者数人アル場合ニシテ且ツ賣拂ニテ得タル代金カ其負債ノ全部ヲ償却スルニ足ラサル時ハ書記其割合分派ヲ為ス時ニ至ル迄右ノ金額ヲ書記局又ハ附託役署ニ留メ置ク可シ

又不当ニ差押ヘラレタル物件ノ代金ヲ引分ケンヿヲ要求スル者アルカ、又ハ其賣拂ニテ得タル代金ニ付キ故障ヲ申立ル権利者アル時ハ其要求又ハ故障申立ニ付キ決定ヲ為スニ至ル迄右同様ノ處分ヲ行フ可シ

若シ賣拂ニ因リ得タル代金ノ高千円ヲ超過スル時ハ必ス之ヲ附託役署ニ附託スルヲ要ス

第三章 艦、船、艇ノ差押

第五十一条 艦、船、艇ノ差押ヲ為スニハ必ス其執行力ヲ有スル証書アルヲ要ス、且ツ豫メ義務者ニ辨濟ヲ為ス可キ要決書ヲ送達スルヲ必要トス

第五十二条 右ノ差押ヲ行フ時ハ必ス左ノ諸件ヲ指示スルヲ要ス

第一、其船号

第二、其所属スル國名、

第三、其船名ヲ簿冊ニ書留メタル湊ノ名、

第四、差押ヲ為ス時ニ其船ノ碇泊スル湊、

第五、其船ノ性質帆前船ナルカ又ハ蒸汽船ナルヿ

司法省

第六、其用方（河船ナルカ又ハ海船ナルヿ、旅人ヲ載セルモノナルカ又ハ商品ヲ載セルモノナルヿ、遠國ニ航行スルモノナルカ又ハ内國ニ限リ航行スルモノナルヿ）

第七、其船力即チ噸數

第八、其航行スルヲ得可キモノナルカ又ハ航行スルヲ得可カラサルモノナルヿ、

第九、所有者及ヒ船長ノ姓名、

又綱具大砲其他航行中ニ必要ナル附属品、食物、衣服類、商品、其外金錢等モ亦必ス其大要ノ摸様ヲ調書ニ記列スルヲ要ス

且ツ此差押ヲ為スニハ右ノ外、動産ノ差押ニ付キ定メアル諸多ノ条件ヲ以下ノ箇条ニ記載アル區別ニ従ヒ同シク適施ス可シ

第五十三条　五噸以上ノ船ナル時ハ其船ノ碇泊セシ土地ノ管轄内ニ在ル民事裁判所ニ於テ裁判補官一名ノ面前ニテ其賣拂ヲ行フ可シ、此裁判補官ハ自ラ其糶賣ヲ監視シ以テ書記立會ノ上ニテ買受ノ定マリタルヿヲ言渡ス可シ

第五十四条　船ノ所有主カ日本國内ニ在ル時ハ之ニ其差押ノ報知ヲ為シタル日ヨリ一ケ月ヲ経タル後ニ非サレハ其賣拂ヲ行フ可カラズ、又右ノ所有者カ外國ニ滞留スル時ハ其船長ニ差押ノ報知ヲ為シタル日ヨリ一月ヲ経タル後ニ非サレハ右ノ賣拂ヲ行フ可カラズ

第五十五条　賣拂ハ豫メ八日間ツヽヲ隔テヽ三度ニ左ノ場所ニ掲示ヲ為シテ之ヲ公示ス可シ

第一、民事裁判所ノ門前

第二、邑廳

第三、商人集會場

第四、所有者又ハ船長ノ住所

第五、其船ノ碇泊スル港ノ掲示場

右ノ外其賣拂ノ事ヲ擔任スル裁判官ヨリ指示スル新聞紙上ニ右同様ノ時間ヲ隔テヽ三度ニ之ヲ廣告ス可シ

掲示及ヒ廣告ニハ必ス右ノ裁判官ヨリ任シタル鑑定人ノ評定シタル代價ヲ記載スルヲ要ス

第五十六条　若シ其船ガ書入質ノ抵当ニ為サレタルモノナル時ハ其差押ノ事、其賣拂ノ為メニ定マリタル時日ノ事、及ヒ賣拂ヲ行フ場所ノ事等ハ所有者ニ之ヲ報知スルト同時ニ其書入質ノ権利者ニモ亦之ヲ報知スルヲ要ス

附言○船艦等ノ書入質ヲ為スヿハ既ニ欧洲ノ諸國就中佛蘭西ニ於テハ數十年以前ヨリ之ヲ允許セリト虽氏日本ニ於テハ未タ之ヲ実行セシヿ無キヤ疑ナシ、然レ氏後日必ス此方法ヲ允許スルノ期アル可シ、本条ハ豫メ之ヲ規定スルノミ

司法省

第五十七条 若シ賣拂ヲ行フ前他人其船ヲ已レニ取戻サンガ為メニ故障ノ申立ヲ為ス時ハ裁判官其裁判所ヘ要求ヲ為スタメニ之ニ猶豫ノ期限ヲ許ルス可ク、且ツ其裁判言渡ヲ為スニ至ル迄右ノ賣拂ヲ停止ス可シ

若シ其期限中ニ右ノ要求ヲ為サヽル時ハ故障ノ申立アルニ拘ハラズ其賣拂ヲ行フ可シ、但シ右ノ取戻ヲ為ス者其賣拂ノ代金ニ付キ故障ノ申立人ト為リテ共ニ之ニ参スルハ格別ナリトス

第五十八条 差押人ニ代金ヲ渡スニ付キ糶賣ヲ為シタル日ヨリ三日内ニ他ノ故障ヲ申立ル者アル時ハ必ス其申立ヲ允許ス可シ、但シ右三日ノ期限ヲ経過シタル後ニ至レハ差押人ト要益ニ已レヲ知ラシメタル故障申立人トノ間ニ其代金ヲ分配ス可シ

第五十九条 五噸又ハ其以下ノ船艇、水車、浴船及ヒ其他水上ニ在リテ動ク可キ建造物等ニ関スル場合ニ於テハ必ス其差押ノ報知ヲ為シタル日ヨリ八日間ヲ経タル後其賣拂ヲ行フ可シ

右ノ賣拂ハ治安裁判官ノ面前ニテ書記立會ノ上之ヲ行フ可シ

此賣拂ハ行フ日ヨリ少ナクトモ三日以前ニ其賣拂ヲ為ス可キ場所、邑廳及ヒ所有者ノ門前ニ其掲示ヲ為ス可シ

第六十条 船艦ノ差押ヲ為シタル上ニテ其羅賣ヲ行フ時ハ当然其船艦長ノ契約ヲ解止シ且ツ水夫等ノ賃料ヲ拂フヿヲ止ムル者トス、但シ右等ノ者其代金ニ付キ相当賠償ヲ要ムルハ格別ナリトス

第四章 収納ヲ為ス以前ニ行フ菓実ノ差押（セジー、ブランドン）

第六十一条 未タ土地ニ在ル菓実ハ其種類及ヒ地方ノ摸様ニ因リ通常成熟ノ期ヨリ前少ナクトモ六週内ニ非サレバ之ヲ差押フ可カラズ又之ヲ賣拂フ可カラズ

差押ヲ為ス時ハ必ス豫メ執行力ヲ有スル証書ヲ以テ要決ノ書ヲ差出ス可シ

第六十二条 若シ其菓実差押ヲ受ケタル者ノ食料ニ供ス可キモノナルカ又ハ日用品ナル時ハ其者及ヒ其者ト同居スル家族ノ一月間ニ用フルニ必要ナル部分ヲ残シ置ク可シ

司法省

第六十三条　若シ耕作人其菓実ヲ差押ヘラレタル土地ノ耕耘スル為メニ牛馬ヲ使用スル時ハ其獣類ノ中一定ノ一ケ月間ニ用フル飼料ヲ残シ置ク可シ

第六十四条　又次季ニ蒔キ付ケル為メニ充分ナル種子ノ高ヲ残シ置ク可シ但シ其耕作人其収納ヲ為シタル後直ニ終ハル可キ土地ノ賃借人ナル時ハ格別ナリトス

第六十五条　右二箇条ニ定メアル規則ハ土地ノ耕作人所有者又ハ賃借人ニ付キ行フ諸多ノ動産物ノ差押ニモ亦等シク之ヲ適施ス可シ

第六十六条　差押ヘタル収納物ノ看守又ハ監

視ハ田野看守役又ハ其他田野警察ヲ擔任スル吏員ニ之ヲ任ス可シ、若シ右等ノ吏員ニ差支ヘアル時ハ最近ニ在ル耕作人ノ中一人ニ之ヲ任ス可シ

第六十七条　賣拂ハ其菓実ノ成熟スル期ニ成ル可ク接近シタル時分ニ至リ之ヲ行フ可シ

右ノ賣拂ハ其差押ヘタル収納物ノ中重立タルモノヽ存在スル邑ノ重立タル場所ニ於テ之ヲ行フ可シ、但シ其差押ヘタル収納物カ諸多ノ邑内ニ在ル時ト雖モ亦右同様ナリトス

成ル可ク開市ノ日ヲ選テ右ノ賣拂ヲ行フ可シ

第六十八条　掲示ハ賣拂ヲ行フ場所、邑廳ノ門前及ヒ差押ヲ受ケタル者ノ門前ニ八日以前ニ之ヲ為ス可シ、掲示ニハ左ノ諸件ヲ記載ス可シ、即チ賣拂ヲ行フ日、差押ヲ受ケタル者ノ姓名、差押人ノ姓名、菓実ノ種類、其菓実ノ在ル土地ノ廣狭

第六十九条　収納物ノ入費ハ總テ糶賣ノ買受人ニテ之ヲ擔当ス可シ

賣拂ヲ為ス前ニ菓実ヲ収納スルコトヲ要スル時ハ正当ニ差押ヲ受ケタル者ニ其旨ヲ告知シタル後其者ノ面前ニテ其差圖ヲ受ケテ右ノ収納ヲ為ス可ク且ツ之ヲ穀倉ニ入レ置ク可シ

第七十条　動産物ノ差押ニ関スル一般ノ規則

ハ未タ収納セサル菓実ノ差押ニモ亦之ヲ適
施ス可シ

第五章　差留メ差押即チ故障差押

第七十一条　仮令ヒ執行力ヲ有スル証書アラズト雖モ一ノ書証ニ因リ権利ヲ確定シ、高ヲ算計シ且ツ要求スルヲ得可キ金額又ハ其他有價物ノ権利者ハ総テ其義務者ニ他人ヨリ義務ヲ免カルヽ為メニ金額其他ノ有價物等ヲ渡スヿニ付キ豫メ要決書ヲ差出スヿ無クシテ差留メ差押即チ故障ノ申立ヲ為スヿヲ得可シ

債主権ハ確定セシモノナルモ未タ其高ヲ算計セサルモノナル時ハ其差押ヲ行フ権利者、後ニ至リ相對ノ上更ニ議定センヿヲ定メ置キ、假リニ自ラ其評價ヲ為ス可シ

第七十二条　権利者書証ヲ有セサル時ハ其義務者ノ住居スル土地ニ在ル裁判所ノ所長カ又ハ其他人ノ住居スル土地ニ在ル裁判所ノ所長ニ対シテ此法官ヨリ假リニ定ムル金高又ハ價額ノ高ニ至ル迄差留メ差押ヲ為サンコトヲ要ムルコトヲ得可シ

右裁判所長其許可ノ與フルコトノ拒ミタル時ハ権利者其権利ノ基本ニ付キ訴訟ヲ為スニ非サレバ控訴スルコトヲ得ズ

第七十三条　差留メ差押ハ他人ノ拂フ可キ総テノ金高又ハ價額ニ付テ之ヲ為スコトヲ得可シ、但シ其金高等ハ未タ善計ヲ為サス且ツ要求ス可キ期限ニ至ラサルモノト雖モ亦右同様ナリトス

差押ヲ受ケタル者ニ渡ス可キ養料食料及ヒ其他法律ニ因リ差押フ可カラズト規定セラレタル物品等ハ悉ク右ノ例外ナリトス

第七十四條　差留メ差押ノ調書ニハ第七条ニ定メアル如ク其証書及ヒ其証書ニ記スル主要ノ事柄ヲ記載スルヲ要ス、但シ若シ其証書ノアラサル時ハ裁判官ノ與ヘタル許可ノ事ヲ附記ス可シ

且ツ差押ノ証書ニハ第十条ノ規則ニ循ヒ選定シタル住所モ亦共ニ之ヲ記載ス可シ

第七十五条　差押ヲ受ケタル者ニ官金支配役ヨリ渡ス可キ金額ニ付キ差留メ差押ヲ行フ

司法省

時ト雖モ等シク本章ノ規則ニ循フ可シ但シ行政法ニ因リ別段ニ規定アル場合ハ此限リニ在ラス

第七十六条 差留メ差押ハ其差押人ノ要求ニ因リ八日内ニ差押ヲ受ケタル義務者ニ之ヲ告知ス可シ且ツ差押ノ当否ヲ裁判セシムル為メニ其義務者ノ住居スル土地ノ裁判所ニ之ヲ呼出ス可キ旨ヲ記シタル召喚状ヲ右ノ告知ト同時ニ送達スルヲ要ス

右ノ告知ハ其差押ヲ受ケタル他人ニモ亦三日間ニ之ヲ送達ス可シ

第七十七条 法律ニ定メアル期限此期限ハ里程ノ遠隔スルニ従ヒ之ヲ増加ス中ニ右ノ告知ヲ為サヽル時ニ其差押ヲ受ケタル他人ヨリ差押ヲ受ケタル義務者ニ為シタル弁済ハ総テ有効ナリトス

第七十八条 差押人ノ利益ノ為メニ前キニ記シタル公正証書又ハ裁判言渡書ノアラサル時ハ裁判所ハ其負債ノ成立ニ付キ決定ヲ為ス可シ其差押ニ関スル法律上ノ条件ヲ悉ク完備スルニ於テハ其差押ノ有効ナル旨ヲ言渡ス可シ之ニ反スル場合ニ於テハ差押ヲ受ケタル義務者ノ要メニ因リ其差押ヲ除去ス可キ旨ヲ命ス可シ

第七十九条 若シ差押ヲ以テ有効ナリト云渡シタル時ハ其差押ノ受ケタル他人ヲシテ自

己ノ擔当スル義務ノ原由及ヒ金高ヲ申述セシムル為メニ其者住居スル土地ニ在ル裁判所ニ之ヲ呼出ス可シ

差押ヲ受ケタル他人自ラ保有スル動産物ニ付テ差押ヲ行フタル時ハ右ノ他人ヨリ其換様書及ヒ評價書ヲ差出ス可シ

第八十条　差押ヲ受ケタル他人自ラ其義務ヲ擔当セシヿ無シト述ベスシテ唯其義務未必ノ条件ニ関スルモノナリト主張スルカ又ハ未タ要求ス可キ期限ニ至ラサルモノナリト主張スル時又ハ義務ノ相殺アリタルカ若クハ残金拂ナルカ又ハ其他自ラ擔当スル負債ノ全部或ハ一部ノ消滅スル原由アリト申立テル時ハ必ス之ヲ詳明ス可ク且ツ其証據トナル可キ書類ヲ合併シ置ク可シ

且ツ若シ同一ノ金高又ハ價額ニ付キ既ニ行フタル差留メ差押又ハ已レニ告知セラレタル債主權ノ讓渡アル時ハ右ノ外ニ其旨ヲ明陳スルヲ必要トス

第八十一条　右ノ申立ハ差押ヲ受ケタル他人又ハ其部理代人若クハ總理代人ヨリ十日ノ期限内ニ裁判所ノ書記局ニ之ヲ為ス可シ

若シ其負債ガ治安裁判官ノ管轄ニ係ル可キモノナル時ハ治安裁判所ノ書記局ニ右ノ申立ヲ為スヿヲ得可シ

第八十二条　差押ヲ受ケタル他人ノ請求ニ因

リ右申立書ノ寫ハ其差押ヲ行フタル権利者ニ之ヲ送達ス可シ若シ其申立ヲ為サシムル為メニ右ノ他人ヲ呼出サシメタル権利者数人アル時ハ各権利者ニ其送達ヲ為ス可シ若シ又右ノ申立ヲ為シタル後更ニ新ノ差押又ハ譲渡アル時ハ右同様ノ方法ニテ其送達ヲ為ス可シ但シ此場合ニ於テハ其差押ヲ受ケタル他人預メ書記局ニ申立ヲ為スコト無ク直ニ其送達ヲ為ス可シ

第八十三条　差押ヲ受ケタル他人前条ニ定メアル期限中ニ申立ヲ為サズ且ツ其送達ヲ為サヽル時ハ差押人其差押ヲ受ケタル他人ノ住居スル土地ノ裁判所々長ニ請フテ相当ノ期限ヲ定メシムルコトヲ得可シ而シテ此期限ヲ経過シタル後ハ其差押ヲ受ケタル他人ニ對シテ単純ノ義務者ニ於ケルカ如ク欠席裁判ヲ為シ以テ其差押ノ原由ニ因テ払フ可キ高ニ至ル迄其義務ヲ尽ス可シト云渡サシムルヲ得

右ノ如クニ定メタル期限ハ裁判官ノ命令ヲ其本人又ハ本人ノ住所ニ送達シタル日ヨリ之ヲ算計ス

第八十四条　差押ヲ受ケタル他人ノ申立カ明確ナル時又ハ此他人単純ナル義務者ノ如クニ裁判ヲ受ケタルカ若クハ其以下ノ金高ニ付キ裁判ヲ受ケタル時ハ権利者ノ通常割合

分派ノ規則ニ循ヒ其差押ヲ為シタル諸権利者ノ間ニ於テ各自ノ得可キ金高ヲ分配ス可シ

又右ノ他人義務者ナリト決定ヲ受ケタル動産物ノ高ニ付テモ亦右同様ナリトス此等物品ハ悉ク通常ノ動産差押ニ付キ定メアル規則ニ循テ之ヲ売払フ可シ

第八十五条 何レノ場合トモ差押ヲ受ケタル他人ハ第七十九条及ヒ第八十条ニ規定アル申立ヲ為シタル後自ラ擔当ス可キモノト認メタル金高ヲ附託役署ニ預ケ以テ其利息ヲ払フ可キ責及ヒ損失ノ償ヲ出ス可キ責ヲ免カル、ヿヲ得可シ

第八十六条 最初ニ差押ヲ受ケタル原由ノ高ガ其差押ヲ受ケタル他人ノ払フ可キ金高ヨリ以下ナルニ因リ右ノ他人其余分ノ高ヲ、差押ヲ受ケタル義務者ニ弁済スルモ差支ヘナシト思考シ、以テ其弁済ヲ行フタル後更ニ新ノ差留メ差押ヲ行フ時ハ必ス現ニ其者ノ有スル金高ノミニ之ヲ限ルモノトス、但シ新ノ差押人アルニ因リ最初ノ差押人ガ被ムルニ至リタル損失ノ責ハ右ノ他人自ラ之ヲ擔当ス可シ

第六章　保存差押

第八十七条　義務者ノ動産物ハ左ノ場合ニ於テ既ニ過期シタル負債ニ付キ保存ノ方法ニテ之ヲ差押フルコトヲ得可シ

第一、辨濟ヲ為サヽルニ因リ争論ニ係リタル為替手形又ハ「ビエー、タ、ヲルドル」手形ニ付キ主タル義務者トシテ已レノ姓名ヲ手署シタルカ若クハ保証人トシテ已レノ姓名ヲ手署シタル時、

第二、其者遠地ニ航行セントスル船ノ船主又ハ船長ニシテ且ツ其船ヲ修繕センカ為メ若クハ旅行中ニ要用ナル綱具及ヒ其他衣食料等ヲ供給スル為メニ約定シタル義務ナル

時、
第三、其者市商又ハ旅商ニシテ市場若クハ自己ノ住居スル土地以外ノ地方ニテ一ノ義務ヲ擔当シタル時

第八十八条　前条ニ定メアル第一ノ場合ニ於テハ義務者ノ住居スル土地ニ在ル民事裁判所ノ所長其差押ノ許可ヲ与フ可ク第二ノ場合ニ於テハ其船ノ碇泊スル土地ヲ管轄スル民事裁判所ノ所長其差押ノ許可ヲ与フ可シ第三ノ場合ニ於テハ其差押ヲ為サントスル物件ノ存在スル土地ノ治安裁判官ニ就テ其許可ヲ要ム可シ

第八十九条　右ノ場合ニ於テハ仮令ヒ約定シクル期限ニ至ラサル時ト雖ヒ等シク保存差押ヲ為スコトヲ得可シ
第一、義務者真ニ無資力ナル場合
第二、義務者ノ所有スル財産ノ中多クノ部分ヲ其権利者ノ害トナル可キ詐偽ヲ為シテ他ニ譲渡シタルカ又ハ他ノ権利者ヨリ之ヲ差押ヘラレタル場合
第三、義務者其差押人ニ供給シタル特別保証物ヲ毀損若クハ減少シタルカ又ハ自ラ約諾シタル保証物ヲ之ニ供給セサル場合、
第四、義務者自己ノ住所ヲ立去リタル後現在滞留スル所ニ其権利者ニ秘隠スル場合
第五、義務者外國人ニシテ再来ノ意ナリ且

ッ書入質ト為サヽル不動産ヲ残シ置クヿ無ク将ニ日本國ヲ去ラントスル場合

第九十条 前条ニ定メアル差押ノ許可ヲ請求スルニハ左ノ如ク區別ヲ為ス可シ

第一第二第三ノ場合ニ於テハ其義務者ノ住居スル土地ニ在ル民事裁判所ノ所長ニ之ヲ請求ス可シ

第四第五ノ場合ニ於テハ其差押フ可キ物件又ハ其中ノ大部分カ現在スル土地ノ治安裁判官ニ之ヲ請求ス可シ

第九十一条 第十四条以下ノ規則ヲ以テ差押フ可カラズト明定サレタル物件ハ保存ノ名義ニテモ亦之ヲ差押フルヿヲ得ズ

又将ニ出帆セントスル船ナル時ハ其船ニ付テモ又其航海ノ為メニ必要ナル綱具其他ノ諸具ニ付キテモ決シテ差押ヲ為ス可カラズ

第九十二条 第八十七条ニ規定アル三個ノ場合ニ於テハ差押人自ラ申立ル權利ノ基本ニ付キ且ツ差押ノ効果ニ付キ決定ヲ為サシムル為メニ八日内ニ其差押ヲ受クル者ヲ裁判所ニ呼出ス可シ但シ其差押證書ノ寫ハ呼出書ト共ニ之ヲ送達スルヲ要ス

差押人ノ利益トナル可キ裁判言渡アリタル時ハ通常ノ法式ニ循ヒ要決書ヲ出シ執行差押ヲ為シ且ツ賣拂ヲ行フ可シ

但シ差押ノ調書ニハ保存ノ名義ニテ既ニ差

押ヘラレタル物件ヲ記列ス可カラズ唯之ニ
合従アル寫ノ事ヲ附記ス可シ

第九十三条　第八十九条ニ規定アル五個ノ場合ニ於テハ差押人前キニ約定セシ期限ヲ失セシムル為メ且ツ前条ニ規定アル如ク権利ノ基本ニ付キ決定ヲ為サシムル為メ三日内ニ其差押ヲ受ケタル者ヲ許出ス可シ

第九十四条　何レノ場合ト雖モ差押ヲ受ケタル者ハ其差押ニ付キ故障ノ申立ヲ為シ以テ其差押ノ無効ナル旨ヲ言渡サシムル為メ且ツ其損害ノ賠償ヲ求ムル為メニ自ラ差押人ヲ裁判所ニ呼出スヿヲ得可シ

第七章　不動産差押

第九十五条　書入質ノ抵当ヲ有スル権利者ハ其抵当タル財産ニシテ尚ホ義務者ノ所有中ニ在ルモノニテ不充分ナル場合ニ非サレド其権利ノ為メニ曾テ書入質トナラサル不動産ヲ差押ヘルヿヲ得ズ

他人ナル保有者ニ對シテ行フ書入質ニ関スル訴訟規則ハ總テ之ヲ民法ニ記定ス(第四編)

第九十六条　義務者ガ他人ト未分ニテ所有スル不動産即チ義務者ト他人トノ間ニ未分ニテ存在スル不動産ハ義務者一人ニテ所有スル財産ニテ不充分ナル場合ニ非サレハ之ヲ差押ヘルヿヲ得ズ

右差押ヲ為ス場合ニ於テハ總テノ共同所有者裁判所ヨリ定ムル期限中ニ其財産ノ分派ヲ行フ可キ求メヲ受ク可シ但シ若シ期限内ニ分派ヲ為サヽルニ於テハ右共同權利者相互ノ權利ハ其財産ヲ糶賣シテ得タル代金ノ高ニ付キ之ヲ筭計ス可シ

第九十七条 若シ義務者幼年ナルカ又ハ治産ノ禁ヲ受ケタル者ナル時ハ其動産ノミニテ不充分ナル場合ニ非サレハ其不動産ノ差押ヲ為ス可カラズ

第九十八条 不動産ノ差押ハ第何条ニ定メアル規則ニ循ヒ辨濟ヲ行フ可キ要決書ヲ差出シタル後三日間ヲ経タル以上ニ非サレハ之ヲ為スコトヲ得ス

假リノ執行力ヲ有スル裁判言渡書アリト雖モ總テノ上許期限ヲ経過シタル上且ツ其決定ガ既判ノ効ヲ得タル後ニ非サレハ差押ヘタル財産ノ賣拂ヲ為ス可カラズ

第九十九条 不動産差押ノ調書ニハ第何条ニ規定アル要目ノ外ニ其差押ヘタル財産ノ明細書、建造物ノ性質、植付物ノ摸様、之ヲ賃借スル者等ヲ詳カニ附記スルヲ必要トス

右調書ニハ必ス其地方ニ在ル邑長ノ験認ノ印ヲ受ク可シ

若シ差押ヘタル財産總テ継續スルモノニシテ數邑又ハ數街ニ跨ル時ハ其財産ノ中重立

タル部分ノ在ル土地ノ邑長ノミ其験認ノ印ヲ附スヲ可シ

第百条　借家人、借地人又ハ其財産ヲ賃貸セリル時ハ義務者其財産ノ附託人或ハ番人ニ任セラルヽコト有ル可シ但シ其者差押ヘラレタル動産ノ看守ヲ為スニ付キ第何条ニ定メアル条件ヲ守ラサリシ時ト雖モ亦右同様ナリトス

第百一条　差押調書ノ写ハ義務者本人又ハ其住所ニ之ヲ報知ス可シ

邑長ハ其報知書ノ正本ニ験認ノ印ヲ附ス可シ

第百二条　差押ノ調書及ヒ報知書ハ差押人ノ要求ニ因リ登記局ニ於テ之ヲ登記ス可シ

若シ差押ヘラレタル財産ガ登記局ノ諸多ノ管轄内ニ在ル時ハ各部分ニ付キ別々ノ登記ヲ為スヲ要ス

差押ノ登記ヲ行フ以後ニ作為又ハ登記シタル物上権移轉ノ証書若クハ物上権設定ノ証書アリト雖モ決シテ其差押人ニ對シテモ又其他ノ権利者ニ對シテモ之ヲ以テ故障ヲ述フルヿヲ得ズ

第百三条　若シ新ノ権利者同一ノ財産ニ付キ差押ヲ行フ件ハ更ニ登記ヲ為スヿヲ必要トセズ、但シ最初ニ行フタル登記ノ欄傍ニ新ニ行フ差押ノ事ヲ附記スルヲ要ス

若シ新ニ行フ差押ノ中ニ最初ノ差押ニ加ハヽラサル財産アルニ於テハ其超過スル高ノミニ付テ登記ヲ為ス可シ

最初ニ行フタル差押カ無効ニ帰スルカ又ハ随意ニ其差押ヲ解キタル時ハ新ノ権利者ハ当然最初ニ行フタル登記ヨリ生スル利益ヲ得ルノ権アリトス

第百四條 差押ヲ為ス前後ニ拘ハラズ民法ニ定メアル規則(第何条)ニ循ヒ権利ノ権利ヲ害ス可キ詐偽ヲ行フテ、其登記ヲ為ス以前ニ右同様ノ証書ヲ記シタル時ハ其権利者ノ求メニ因リ更ニ之ヲ廃棄セシムルヲ得可シ

第百五条 若シ其不動産賃貸セラレタル家屋又ハ土地ナル時ハ其賃銀ハ登記ヲ為シタル日ヨリ之ヲ不動産ト看做シ以テ其不動産賣買ノ代金ト共ニ合シテ之ヲ分配ス可シ

右ノ財産賃貸ニセサルモノナル時ハ差押人、治安裁判官ノ許可ヲ得タル上穀類ノ収納ヲ為サシムルカ又ハ樹木ノ通常代採ヲ行ハシメタル後其菓実ノ賣拂ヲ為サシムルコヲ得可ク又ハ其土地ニ在ル侭ニテ賣拂ハシムルコヲ得可シ、而シテ其賣拂ニテ得タル代金ノ高ハ賃貸ノ代金ニ等シク附記ヲ為ス可ク且ツ之ヲ分配ス可シ

第百六條 差押人ハ其不動産ヲ糶賣ニテ賣拂ハシメンガ為メニ登記ヲ為シタル日ヨリ一

月内ニ一ノ請求書ヲ裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

右請求書ニハ左ノ諸件ヲ附記スルヲ要ス

第一、既ニ執行シタル訴訟手續書類ノ要目

第二、賣拂ノ日附

第三、賣拂ノ手續ヲ為ス權利者ノ附ケ直段

第四、差押ヘタル財産ニ関スル租税表ノ抜書

第五、其他賣拂ニ関スル責務及ヒ条件就中糶賣ノ代金ニ准シテ納ム可キ百ニ付キ幾分ノ補足税ニシテ其訴訟手續ノ入費ニ充ツ可キ税金

第百七条　右請求書ハ差押ヲ受ケタル義務者及ヒ其差押ヘタル財産ニ付キ記入シタル特權又ハ書入質ノ權ヲ有スル權利者ニ五日内ニ之ヲ報知スルヲ要ス

且ツ右等ノ者ニハ之レト同時ニ左ノ諸件ヲ記シタル告知書ヲ渡ス可シ即ケ其財産ノ現在スル土地ノ裁判所ニテ開ク公ケノ訟廷ニ出席ス可キ事、請求書ノ朗讀ヲ為ス時ニ出席ス可キ事、并ニ其賣拂ノ条目要件及ヒ日附等ニ付キ各自ノ意見ヲ述フル事ナリ

裁判所ニテハ此事柄ニ関シテ双方互ニ申立ル故障及ヒ其他ノ諸件ニ付キ決定ヲ為シ以テ其地方ニ在ル新聞紙ノ中一ヲ選テ其箇条書ヲ改メタル要目ヲ廣告ス可キ旨并ニ其掲

司法省

示ヲ為ス可キ旨ヲ命ス可シ、但シ此裁判所ノ言渡ニ付テハ控訴ヲ為スコトヲ許ルサズ

第百八条　掲示ハ左ノ場所ニ之ヲ為ス可シ

第一、差押ヲ受ケタル義務者住所ノ門前

第二、差押ヘタル建造物ノ表門

第三、義務者ノ住所及ヒ差押ヘタル財産ノ全部又ハ一部ノ現在スル土地ノ管轄内ニ在ル邑廳及ヒ治安裁判所ノ門前

第四、右邑内ニ在ル重立タル公ケノ場所

第五、差押ヲ受ケタル者ノ住所ヲ管轄スル裁判所、差押ヘタル財産ノ現在スル土地ヲ管轄スル裁判所及ヒ其賣拂ヲ行フ可キ裁判所等ノ門前

第百九條　掲示ヲ為シタルコトハ書記局ニ在ル吏員ノ中一人ノ申述書ヲ以テ之ヲ証ス可シ、且ツ邑長ハ其掲示書ノ中一通ニ験認ノ印ヲ附ス可シ、此邑長ノ験認ヲ為シタル掲示書ハ廣告ヲ記載シタル新聞紙一葉ト共ニ之ヲ書類ニ合併ス可シ

第百十条　右ノ公示ハ其糶賣ヲ為ス前少ナクトモ十五日以上多クトモ三十日以下之ヲ為ス可シ

第百十一条　差押ヲ受ケタル者及ヒ差押人ハ自己ノ入費ヲ以テ自ラ要用ナリト思考スル場所ニ掲示ヲ為スタメニ裁判所ニテ定メタル掲示ノ数ト同様ナル数ニ至ル迠之ヲ受取

ル丁ヲ得可シ

第百十二条 糶賣ハ何レノ理由アリト雖モ第百七条ニ定メアル日附以前ニ之ヲ行フ丁ヲ得ズ

糶賣ハ重大ノ事故アルニ確証アルニ於テハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ遅延スル丁有ル可シ

此場合ニ於テハ新ニ其公示ヲ為スヲ要ス

第百十条ノ規則ヲ以テ定メアル最短ノ期限及ヒ最長ノ期限ハ之ヲ半期ニ減少ス可シ

第百十三条 糶賣ノ為メニ指定セル日時ニハ其財産ノ現在スル土地ヲ管轄スル裁判所ノ公廳ニ於テ其處分ヲ行フ丁可シ但シ原告人ヨリ新ノ請求ヲ為ス丁ヲ要セザルナリ

第百十四条 原告人其申立ヲ止メタル時ハ執行力ヲ有スル証書ヲ所持スル他ノ権利者自ラ右原告人ノ権利ニ代位シ以テ其侭ニテ差押ヲ行ハシムル丁ヲ得可シ

若シ諸多ノ権利者ノ間ニ権利ノ競争アル時ハ第百三条ニ規定アルカ如ク其中第二ノ差押ヲ為シタル者ヲ以テ当然先取ノ権アリトス

若シ又諸多権利者ノ中何人タリトモ右ノ場

合中ニ在ラサル時ハ請求者ノ中一人最モ重要ナル債主権ヲ有スル者ヲ以テ先取ノ権アリトス

第百十五条　第百三条ニ記載アル場合ノ外ニ於テハ当然ノ代位アルヿ無シ但シ右ノ代位ハ諸権利者ノ請求ニ因リ裁判所ニテ之ヲ言渡ス者トス

何レノ場合ト雖モ代位アル時ハ第百十二条ニ規定アル期限及ヒ法式ニ従ヒ糶賣ヲ為スヿヲ停止スル者トス

第百十六条　糶賣ヲ行フ前書記ハ買受人ト差押ヲ受ケタル者トノ間ニ契約ヲ成スカ為メニ設ケアル箇条書ヲ朗読ス可シ

差押ヲ受ケタル者、差押人及ヒ其不動産ニ付キ特権又ハ書入質ノ記入ヲ為シタル権利者皆承諾ヲ為シタル以上ニ非サレハ何レノ変更ト雖モ決シテ之ヲ為スヿ能ハサル者トス、又仮令ヒ変更ヲ為ス場合ト雖モ其糶賣ヲ停止スルヿ無シ

第百十六条ノ修正

裁判所ハ糶賣ヲ行フ前先ツ法則ニ定メアル如クニ法式及ヒ期限ヲ守リテ公示ヲ為シタルヤ否ヤヲ調査シ以テ其旨ヲ言渡ス可シ

然ル後書記ハ買受人ト差押ヲ受ケタル者トノ間ニ契約ヲ成ス為メニ設ケアル箇条書ヲ朗讀ス可シ

差押ヲ受ケタル者、差押人及ヒ其不動産ニ付キ特権又ハ書入質ノ記入ヲ為シタル権利者皆承諾ヲ為シタル以上ニ非サレハ何レノ変更ト雖モ決シテ之ヲ為スヿ能ハサル者トス

又仮令ヒ変更ヲ為ス場合ト雖モ其糶賣ヲ停止スルヿ無シ

第百十七条　總テ差押ヲ受ケタル者ニ對シテ其差押ヘラレタル不動産ノ以前ノ移轉ニ付キ自ラ解除ノ權、回復ノ權又ハ廢棄ノ權アリト主張スル者ハ糶賣ノ為メニ開廷スル前ニ裁判所ノ書記局ニ其請求ヲ為ス可シ否ラサレバ糶賣ノ買受人ニ對シテ其訴權ヲ失スル者トス

右ノ請求ヲ相当ノ時分ニ差出シタル時ハ裁判所ニテハ其訴權ヲ證明セシムル為メニ期限ヲ定ム○此期限ヲ経過シタル以上ハ其糶賣ノ處置ヲ為ス可シ○但シ其請求者ノ所為ニ拘ハラサル重要ナル理由アルニ於テハ右ノ期限ヲ延ハスヿ有ル可シ

第百十八条　不動産ハ箇条書ニ記載アル附ケ直段ノ高ニテ糶賣ニ差出ス可シ

附ケ直段ヨリ更ニ高價ヲ附ケルト雖モ必ス左ノ割合ニ等シキカ又ハ此割合ヨリ高キ時ニ非サレハ之ヲ許サヽル者トス

附ケ直段百円又ハ其以下ナル時ハ、、、、五十銭

附ケ直段百一円以上二百円マデ、、、壱円

附ケ直段二百一円以上三百円マデ、、、、二圓

附ケ直段三百一円以上四百円マデ、、、三圓

附ケ直段四百一円以上五百円マデ、、、四圓

附ケ直段五百一円以上千円マデ、、、五円

附ケ直段千一円以上二千円マデ、、、十円

附ケ直段二千一円以上三千円マデ、、、、二十圓

附ケ直段三千一円以上四千円マデ、、、、三十圓

其他ハ皆之ニ准シテ千円又ハ千円ノ分数毎ニ付キ百分ノ一ヲ増加ス可シ

高價ヲ附クルヿ右ニ記列シタル金高ノ中其一ニ達スル時ハ同一ノ割合ニ循テ直段ヲ増加シテ更ニ高價ヲ附クルヲ要ス

第百十九条　總テ糶賣ニテ自ラ價ヲ附ケタル

者ハ己レヨリ更ニ高價ヲ附クル者アルニ至リ自ラ買人タルノ義務ヲ免カルヽ者トス但シ其高價ヲ附ケタルヿ以下ニ記スル理由ニ因リ無効ナリト云渡サレタル時ト雖モ亦右同様ナリトス

第百二十条 糶賣中ハ大概一分時間燃ヘ續ク可キ小蠟燭（大）数箇ヲ裁判所及ヒ公衆ノ面前ニ點ス可シ

若シ蠟燭三箇ノ漸次ニ尽キタル時最後ニ價ヲ附ケタル者ヨリ更ニ高價ヲ附クル者ナキニ於テハ其最後ニ價ヲ附ケタル者ヲ以テ糶賣ノ買受人ナリト云渡ス可シ

第百二十一条 漸次ニ蠟燭三箇ノ尽キタル後豫メ定メアル附ケ直段ヨリ更ニ高キ價ヲ附クル者アラサル時ハ関係人ノ中一人又ハ數人ノ求メニ因リ裁判所ハ直ニ開廷ノ侭ニテ其附ケ直段ヲ下減スルヿニ付キ更ニ糶ヲ為サシムルヿヲ得可シ

右減價ヲ為スヿハ最初ノ附ケ直段十分ノ一ヲ超過ス可カラス

又漸次ニ三箇ノ火尽キタル後尚ホ更ニ高價ヲ附クル者アラサル時ハ裁判所ハ新タニ関係人ノ請求アルヲ待テ附ケ直段ヲ更ニ十分一丈減少スルヿヲ得可シ

糶ニテ價ヲ附クル者アラサル時ハ原告人又ハ差押ヲ受ケタル者ノ求メニ因リ後ニ定ム

ル期日ニ至ル迄其糶賣ヲ延ハス可シ
又関係人ノ中其附ケ直段ヲ下減スル為メニ引続テ開廷アル可キ旨ヲ求ムル者一人モ在ラサル時若クハ此求メヲ為シタル場合ト雖モ裁判所ニテ後日ニ延ハスヲ以テ賣拂ノ為メニ都合宜シト考定シタル時ハ亦右同様ナリトス

第百二十二条　前条ノ終リ二項ニ定メアル規則ニ循ヒ糶賣ヲ停止シタル時ハ原告人、差押ヲ受ケタル者又ハ其他既ニ記入ヲ為シタル書入質ノ權利者ハ總テ附ケ直段ヲ下減シタル上更メテ糶賣ヲ始メンヿヲ記シタル請求書ヲ裁判所ニ差出スヿヲ得可シ
箇条書モ亦第百七条ニ定メアル法式ノ通リニ之ヲ更ムルヿヲ得
新タニ公示ヲ為ス期限ニ関シテハ第百十二条ノ規則ヲ守ル可シ

第百二十三条　更ニ糶賣ヲ始メタル時漸次ニ三個ノ火尽キタル後新ノ附ケ直段ヨリ更ニ高キ價ヲ附クル者アラサルニ於テハ其價ヲ減スル方法（ヲー、ラベー）ニ因リ其糶賣ヲ為スヘシ
其價ニテ承諾スル者アラスシテ三個ノ火尽キル毎ニ附ケ直段ヲ二十分ノ一ツ、下減ス可シ
右ノ通リニ下減シタル價ノ中一ヲ承諾スル

者アル時ハ直ニ其者ヲ以テ糶賣ノ買受人ナリト云渡ス可シ

若シ同時ニ二個ノ承諾ヲ同時ニ為シタル時ハ其二人ノ中一人最モ高キ直段ヲ附ケル者ヲ選テ糶賣ノ買受人ト為ス可シ

第百二十四条　次第ニ價ヲ高クスル方法ニテ糶賣ヲ為スト次第ニ價ヲ減スル方法ニテ糶賣ヲ為スヲ問ハズ糶賣ノ買受人ハ其糶賣ニテ買受ケタル價ノ十分一ヲ直ニ書記ノ手ニ渡ス可シ

此時間中ハ假リニ公廳ヲ停止ス而シテ裁判官ハ更ニ處分ヲ始ムルヿ有ル可キ旨ヲ訟廷ノ公衆ニ報ス可シ

第百二十五条　現場ニ在ル原告人又ハ其適当ノ代理人ヨリ其糶賣ノ買受人ヲ以テ資力アル者ト為シテ之ヲ承諾ス可キ旨ヲ直ニ申述シタル時ハ右ノ買受人ハ其價十分ノ一ヲ差出スヿヲ免ルサレル者トス

若シ原告人自ラ買受人トナリタル時ハ同一ノ方法ニ因リ差押ヲ受ケタル者自ラ右ノ申述ヲ為スヿヲ要ス

政府及ヒ府縣ニテ買受人トナリタル時ハ其納金スルヿヲ当然免ルサレル者トス

第百二十六条　右ノ如ク納金ヲ免セラレタル場合ノ外ニ於テ糶賣ノ買受人直ニ其定メアル納金ヲ為サヽル時ハ更ニ開廷ヲ為シ以テ

之ヲ始メタル通リニ新タニ糶賣ヲ開ク可シ
但シ最初ノ買受人ハ之ニ加ハルヿヲ得ズ
何レノ場合ト雖モ差押ヲ受ケタル者ハ決シテ自ラ買受人トナルヿヲ得ズ

第百二十七条　若シ十分一ノ納金ヲ為シタル糶賣ノ買受人又ハ第百二十五条ノ規則ニ因リ納金ヲ免ルサレタル糶賣ノ買受人後ニ至リテ箇条書ニ定メアル条件ヲ執行セサル時ハ之ヲ狂愚ナル買受人（直訳ナリ）ト看做ス可シ而シテ其不動産ハ更ニ之ヲ糶賣ニ掛ケ以テ第百二十二条ニ規定アルカ如クニ附ケ直段ヲ下減スルヿニ付キ生スル損失ノ責ヲ右ノ狂愚ナル買受人ニ擔当セシム可シ
若シ新タニ行フ糶賣ノ代價ガ最初ニ行フタル糶賣ノ代價ニ等シカラサルカ又ハ之ヲ超過セサル時ハ狂愚ナル買受人自ラ其價ノ差ヲ充ル為メノ金高ヲ差出ス可キ義務アリトス而シテ其十分一ノ納金ヲ為ス可シ
以上ニ定メアル總テノ法式及ヒ其他附属ノ諸件ヲ履行シタルヿハ必ス之ヲ訟廷ノ簿冊ニ記スルヲ要ス

第百二十八条　糶賣ノ裁判言渡書ハ箇条書ノ本書ノ引続ニ之ヲ記載ス可シ
買受人箇条書ニ定メアル總テノ条件ヲ履行シタル旨ヲ証明シタル以上ハ其者ノ証拠トナル可キ為メ之ニ執行力ヲ有スル右裁判言

渡書ノ寫ヲ渡ス可シ

第百二十九条 右裁判言渡ハ其差押ヲ受ケタル者ニ之ヲ告知ス可ク且ツ其買受人ノ費用及ヒ世話ヲ以テ其差押ヲ登記シタル端傍ニ之ヲ附記スルヲ要ス

第百三十条 糶賣ノ裁判言渡ハ第、、、条ノ規則ヲ犯シタルニ因リ大審院ニ上告スルニ非サレバ之ヲ攻撃スル丁ヲ得ス

上告ハ其裁判ヲ言渡シタル日ヨリ十五日以内ニ非サレバ之ヲ受理セル者トス

原告人、差押ヲ受ケタル者、不動産ニ付キ記入ヲ為シタル權利者及ヒ解除回復、又ハ廢棄ノ權ヲ申立ントシテ第百十七条ノ規則ニ因リ之ヲ失シタル者ノミニ限リ右ノ上告ヲ為スノ權アリトス

第百三十条ノ二　不動産ノ糶賣ニ因リ得タル金額ハ之ヲ納メタル時ヨリ四十八時間内ニ書記之ヲ附託庫ニ差出ス可シ、但シ其金高ノ如何ンヲ問ハズ又其不動産ニ付キ、記入ヲ為シタル權利者アルト否トニ拘ハラサルナリ
然レ𪜈書記ハ自ラ前拂ヲ為シタル費用又ハ原告人ノ前拂シタル費用ニシテ正当ノ式ニ從ヒ假リニ相当ノ高ニ評定シタルモノヲ裁判官ノ許可ヲ得タル上ニテ自ラ引去ルヿヲ得可シ、但シ後ニ至リ其不足ノ分ヲ補ヒ又ハ其過分ノ高ヲ減スルハ此限リニ在ラズ

第八章　權利者ノ順序及ヒ權利者ニ分派スル事

第百三十一条　差押ヲ為シタル後糶賣ヲ行フタル不動産ニ付キ特権又ハ書入質ノ権ヲ記入シタル権利者アル時ハ原告人又ハ関係人ノ中一人最モ注意ナル者ノ請求ニ因リ裁判所ノ書記局ニ其証書ヲ差出ス可キ旨ヲ命セラル可シ、但シ之ガ為メニハ必スシモ其賣拂ニ因リ得タル金高ニ付キ故障ノ申立ヲ為スヿヲ要セザルナリ

第百三十二条　他ノ権利者ハ自ラ故障ノ申立ヲ為シ以テ自ラ真実ノモノナル旨ヲ書面ニ記シテ証明スル証書ヲ差出シタル以上ニ非サレバ順序及ヒ分派ニ加入スルヿヲ許ルサヾル者トス

第百三十三条　右ノ故障申立ハ書記自己ノ職権ヲ以テ其地方ニ在ル一ノ新聞紙ニ廣告ヲ為シタル日ヨリ一ヶ月ノ間ニ之ヲ為ス可シ、此廣告ニハ差押ヲ受ケタル義務者ノ姓名、原告人ノ姓名、分派ス可キ金高及ヒ其他右ノ附記ヲ為スニ付キ守ル可キ期限ノ事ヲ記載スルヲ要ス

第百三十四条　又動産差押若クハ制止差押ニ因リ得タル金高ヲ分派スル場合ニ於テモ亦同様ノ法式及ヒ期限ニ循ヒ前条ニ定メアル規則ノ通リニ故障ノ申立ヲ為スヿヲ要ス

第百三十五条　期限アル債主権ハ民法ノ規則ニ循ヒ總テ過期シタルモノト之ヲ看做ス可

シ草案第四百二十五条
停止ノ条件又ハ解除ノ条件ニ関スル債主權ハ總テ同一ノ条件ニテ其中ニ加入スル者トス
成立スルヿノ正確ニシテ未タ義計ノ分明ナラサル債主權ニ付テハ其權利者ヨリ假リニ評價ヲ為サシム可シ

第百三十六条 差押ヲ受ケタル者、原告人又ハ其土地ニ住スル他ノ者ニシテ、真正ノ權利者カ遠行中ナルカ、病中ナルカ、若クハ正当ニ証明セラレタル他ノ理由アルニ因リ故障ノ申立ヲ為スヿ能ハサルヿヲ認知スル時ハ右ノ期限中ニ其權利者ノ名義ヲ以テ自ラ故障ノ申立ヲ為スヿヲ允許セラル可シ
此債主權ハ假リニ記入ヲ為シ以テ相当ノ高ナリト申述シタル金額ヲ指示スルヲ要ス

第百三十七条 義務者、原告人、及ヒ故障ヲ申立タル權利者ハ以上ニ定メアル期限ヲ経過シタル日ヨリ十五日間内ニ其差出サレタル証書、申述書并ニ假リノ評價書ヲ互ニ交付スルヿヲ得可ク、又異議ヲ述ヘルヿヲ得ベシ

第百三十八条 執行力ヲ有セサル証書ニ関スル争論ハ總テ其差押ヲ管轄スル裁判所ニ之ヲ差出ス可ク、且ツ通常ノ事件ニ等シク之ヲ處理シ以テ法律ニ定メアルカ如クニ控訴ヲ為スヿヲ許ルス可シ

但シ右ノ控訴ヲ為シタルニ因リ其處分ヲ為スタメニ余リ長キ期限ヲ過キルニ於テハ裁判所ハ初審裁判言渡ノ濟ミタル後其争論ニ係ル債主権ヲ假リニ允許スルカ又ハ假ニ之ヲ除去スルヲ得

第百三十九条 以上ニ定メアル期限中別ニ争論ナクシテ之ヲ経過シタル後又ハ其争論ニ付キ一旦決定ヲ為シタル後ハ管理裁判官（ジユージ、コンミセール）ヨリ其特権アル権利者又ハ書入質ノ権アル権利者ノ間及ヒ通常権利者ノ間ニ順序ヲ定ムル假リノ規則ヲ為ス可シ

第百四十条 特権又ハ書入質ノ権アル権利者ニシテ已ニ其記入ヲ為シタル者又ハ記入ヲ為スヿヲ免ルサレタル者ハ民法ニ定メアル選擇（プレフェランス）権ノ順序ニ循ヒ順次ニ加ヘラル可シ

他ノ権利者ハ分派ス可キ残余ノ金高ニ比較シテ其債主権ノ高ノ割合ニ循ヒ其順序中ニ加ヘラル可シ

第百四十一条 右ノ如ク其順序中ニ加ヘラレタル権利者等ハ書記ノ書面ニ因リ八日間内ニ書記局ニテ其假リ規則ノ交付ヲ受ク可キ旨ヲ報知セラル可シ

右等ノ者ハ同上ノ期限内ニ自ラ姓名ヲ手署シタル書面ヲ以テ自己ノ意見并ニ異議ヲ申立ルヿヲ得可シ

第百四十二条　右八日ノ定期ヲ経過シタル後ニ至リ裁判官ハ其申立タル異議ニ付キ訟廷ニ於テ決定ヲ為ス可シ

異議ヲ申立タル権利者ハ皆其三日以前ニ呼出ヲ受ク可ク、且ツ他ノ者ヲ交ヘズシテ吟味ヲ受ク可シ

裁判言渡ニ付テハ決シテ上訴ヲ為スヿヲ許ルサズ

第百四十三条　別段異議ヲ申立ル者アラサル時ハ管理裁判官自ラ其旨ヲ順序ヲ定メタル調書ニ記シ以テ其順序ヲ定ムルヿノ終結セシ旨ヲ明告ス可シ、但シ未必ノ条件アル債主権又ハ第何条ニ規定アルガ如ク、ニ限リニ允許セラレタル債主権ニ関スル所ハ右ノ限リニ在ラサルナリ

第百四十四条　右終ハリタル後書記ハ単純ニ允許セラレタル権利者ニ対シテ其附託庫ニアル金高ニ付キ辨済ヲ受ク可キ命令書ヲ渡ス可シ

右権利者ハ書記ノ面前ニテ其命令書ニ自己ノ債主権ノ真実ナル旨ヲ記シテ已レノ姓名ヲ手署シタル申述書ヲ記載ス可シ

第百四十五条　解除ノ未必条件ニ関スル債主権ノ為メニ拂フ可キ金高ハ其返還ヲ為ス可キ場合ニ至リタル時ノ為メニ物上又ハ対人ノ擔保ヲ差出シタル以上ニ非サレバ其権利

者自ラ之ヲ受取ルヿヲ得ズ
停止ノ未必条件ニ関スル債主権又ハ假リノ
處分ニ属スル債主権ニ当ツ可キ金高ハ其供
附託庫ニ残シ置ク可シ

第百四十六条 未必条件ニ関スル債主権又ハ
假リニ允許セラレタル債主権ノ為メニ貯存
セシ金額ガ後ニ至リ其条件ノ成就セサリシ
ニ因リ若クハ其債主権ヲ竟ニ除却セラレタ
ルニ因リ別ニ處分スルヿヲ得ルニ至リタル
時或ハ解除ノ未必条件ノ成就シタル時ハ右
ノ金高ハ前条ニ規定アルガ如ク既ニ順序中
ニ加ヘラルタル権利者ニシテ未タ自ラ充分
ノ辨濟ヲ受ケサル者ノ間ニ之ヲ分派ス可シ
余分ノ金高アル時ハ其差押ヲ受ケタル義務
者又ハ幷テ制止差押即チ故障申立ヲ為サヽ
リシ権利者ニ之ヲ返還ス可シ

司法省

[illegible]